



月刊 DRF

Digital Repository Federation Monthly

創刊号

No. 1 February, 2010

【特集1】DRF新体制が発足！

【特集2】DRF6を開催しました

その他の記事

MLの話題から～未来の論文の形？～雑誌Cellの提案

参加機関紹介 ～OAK:帯広畜産大学学術情報リポジトリ



DRF運営委員：前列右から（※入江伸委員(慶應義塾大学メディアセンター本部課長)は欠席)

内島秀樹委員(金沢大学情報部情報企画課長)、関川雅彦委員(筑波大学附属図書館情報管理課長)、杉山宗武委員(千葉大学情報部学術情報課長)、逸見勝亮委員長(北海道大学附属図書館長)、片山俊治委員(東北大学附属図書館事務部長)、石井道悦委員(広島大学附属図書館副館長)

平成22年2月5日 DRF新体制に！

デジタルリポジトリ連合(Digital Repository Federation: DRF)では、持続的な運営と国際的連携を推進するための体制整備を趣旨として、デジタルリポジトリ連合要項を定め、今後の活動の基盤とすることとしました。この新体制の発足式がDRF6終了後、北海道大学で行われました。参加機関は発足時点で108機関。要項は<http://drf.lib.hokudai.ac.jp/drf/index.php?About%20Us>で公開しています。

どう変わる？

新体制になることでどう変わるのでしょうか？企画WG主査の尾崎氏、国際連携WG副査の杉田氏、技術サポートWG主査の前田氏聞きました。

あの人に
聞きたい!



●DRFはこれまで一つのプロジェクトでしたが、新たな組織としてスタートしました。これまでの研修会を体系化し、リポジトリの持続に最も重要だと考えられているコミュニティ活動もさらにパワーアップするはず。これからどうぞよろしくお願いいたします！（広島大学 尾崎）



●DRFは昨年、オープンアクセスリポジトリ連合(COAR)の設立に協力しました。COARは、とてもゆるやかな、DRFの国際版とも言えるようなコミュニティ。海外のリポジトリ担当者もみな私たちと同じような悩みをかかえています。「どうやって先生方に働きかければいいのか?」「著作権のことよくわかんない」これから、海外と、等身大で、手を携えてことにあたっていく機会がさらに増えるものと思います。（北海道大学 杉田）



●わしにはわからん。(小林よしのり風)でも人が増えたからもっと楽しくなるのは 確実じゃっ！（大阪大学 前田）

運営委員会

委員長：逸見勝亮（北海道大学）

アドバイザー

企画WG

主査：尾崎代（広島大学）

国際連携WG

主査：内島秀樹（金沢大学）

技術サポートWG

主査：前田信治（大阪大学）



「経路の開拓と利用の分析: AIRWay、ZSmeetsIR、HUSCAP」
杉田茂樹(北海道大学)

機関リポジトリと種々の文献DBをつなぐAIRWay、機関リポジトリ公開が文献引用にどのような効果があるかを分析するZSmeetsIR、そして北大HUSCAPの現状を紹介し、今後の展望についても言及した。



「図書館活動とオープンアクセスの接点」
鈴木雅子(小樽商科大学)

機関リポジトリとILL業務の融合を検討するIRcuresILL。NACSIS-ILLで依頼回数が多い文献は特定のもので、その著者は著作を機関リポジトリで公開したいことが分かった。「あとは図書館がやるだけだ！」



「初心者コミュニティ形成のサポート」
前田信治(大阪大学)

多くのワークショップに携わったが、どのイベントにおいても、参加者に個人的な接触を試みた。その経験から、公式イベントはきっかけに過ぎないことがわかってきた。先に良い土(関係)を作ること、果実はあとからついてくる。



「大学図書館と学会出版: 共生? それとも競争?」
斎藤未夏(筑波大学)

学会のオープンアクセスのポリシー調査プロジェクト、SCPJの紹介、その経験から、図書館から見た学協会、学協会から見た図書館の双方の立場から見た文化のディスコミュニケーションの原因について考察。

まだまだ新しい業務

- ・新機軸を！
 - 文献DB起源の公開動誘、ダウンロード数通知サービス、受賞論文ピックアップ、大学出版会連携、研究業績DB連携、グッズ、ILL連携、...
- ・蔵書構築との関係は?(研究成果の蓄積と供用が今後の図書館の仕事であるのなら)
- ・図書館司書である以前に大学職員
 - 広報、研究評価、科学コミュニケーション、...
- ・ノウハウの継承(とくに教員とのつながり)

今後の検討課題と思うこと

- ・もっと他の図書館サービスでも、相乗効果が期待できる運用ができるのではないかな?
- ・小さな機関のIR構築・運用ノウハウの共有
- ・コンテンツ構築を各IRごとに考えているのか?
 - 教員の移籍に伴うコンテンツの重複、登録作業の重複!

WSはきっかけに過ぎない 諸君、集結!

頼れる人(個人)を探している

システム、著作権、学内合意形成...

顔が見えないと、どうしてもダメ

これからの5年間

■ 図書館が「すべきこと」ではなく図書館が「できること」を

- 自らの役割を限定することはない
- これまでの経験と知識を武器にアピール

他の誰かでもできること、でも図書館がやればもっとうまくできる

そして図書館が力を合わせればもっとすこいことができる

DRF6 session1 「これまでの5年間」

機関リポジトリに関しての展望は

- ・現状
 - CSIによる助成が象徴するもの
 - DRFが象徴するもの
 - 比較的古い世代の連携の進捗が象徴するもの
 - 個別プロジェクトが象徴するもの
 - 図書館のトータルな課題とのつながりのなさ
 - 図書館連携の現状(status quo)との整合性のなさ
- ・今後のこと
 - 自立の努力(立案・実施だけでなく、評価も)
 - 図書館コミュニティの結束
 - 自立・連携の文化を他の図書館・イシューにも(管理職の役割?)
 - 外部への働きかけ
 - 海外との対比較と背伸び
 - 既存の組織と連携する線やかなる場合と自由な活動

IR運動が、大学図書館にもたらした影響を、図書館組織、図書館間連携、専門性、国際化、研修体系の観点から分析し、特に人材育成という視点からのIR運動の評価を行った。

「リポジトリのこの5年、これからの5年」
内島秀樹(金沢大学)

地域構築の意義とは

- ・地域構築の一番いいところは顔の見えるサポートコミュニティ
- ・実践や流行で終わらせない

地域拠点リーダーとコミュニティの組織体系化

地域共同リポジトリの現状について、運用機関数、アンケート調査の結果、今後の課題について紹介。「しくみだけあってもリポジトリが機能しないのは明らか。共同リポジトリは複数機関リポジトリの共同体だ。」

「地域連携による共同推進: 地域共同リポジトリ」
尾崎文代(広島大学)

機関リポジトリによる

- ・新しい情報流通
- ・新しい図書館
- ・新しい図書館間協力

ROAT(ログ解析)、cuwic(e-science)、UsrCom(システムの構築支援)の紹介。「どんな団体だって入るだけではメリットはない、メリットは自分たちで作るものだ。」

「技術情報の普及と支援ツール開発」
森一郎(千葉大学)

機関リポジトリから見た将来構想

□ 揺籃期から発展期へ

- 利用者にとって使えるサービス・質
- 重層的なサービス群

付加価値サービス・専門性・先進性

Aggregated 網羅性

Projects Topics 分野 Portal ex. DRF-IR

機関リポジトリ 網羅性 信頼性 網羅性

出版 "A Retrospective of IIR Projects on New Perspectives in CSI" Jun. Asachi (NII) (2009.2/04) URL: http://ir.lib.nii.ac.jp/ir/index.php?DRFIC2009

CSI事業これまでの5年間を振り返り、CiNii・研究者リゾルバー・JAIRO・KAKENの新機能、CSI第3期の基本方針について紹介。“Our future is in your hands!” 次世代と一緒に作りましょう!

「次世代学術コンテンツ基盤構築: NIIがめざす近未来」
杉田いづみ(国立情報学研究所)





“DRFという名前を思いついた瞬間の記憶を今日思い出した。NIIのコンテンツ課で尾城さんと話をしていた時に、思いついた名前がDRF。「日本の」とか一切つけないで、そのまま世界組織に出来る名前。今考えると極めて適切。志は最初からそんなところ” 土屋俊

“リポジトリはまだ発展段階で、業務が図書館員の各層に広く浸透していない。リポジトリを持続的に行うには、人を育てること、そして継承できる体制とすることが課題。DRFはCSIの1期2期を通してそれを補うべく各大学を横断的に下支えしてきていると思うので、今後もこの活動は重要となる” 杉田福夫

“今、大学で「知の集積」がキーワードに。総合学術データベースみたいなものを作って図書館で、という話も出かかっている。図書館が手をつけたリポジトリが、想定範囲にとどまらず広がっていく可能性があるのではないか” 関川雅彦

“ランガナータンの5原則の「本」を「情報」に置き換えれば普遍原則ではないか。そこを見失わずチャレンジすれば図書館の仕事は残る。リポジトリだけでなく図書館の仕事にやりがいをもてる環境を作ること” 片山俊治

“いろんな面で活性化する中にリポジトリの未来がある” 石井道悦

“これまで5年DRFをやって考えていたのはDRFに入る意味について説得してもらうことの難しさ。今回、108機関入ってくれた。入ったってことがどういうことか、これから5年みんなで考えていきたい” 内島秀樹

“この先の5年を考えるために3つのキーワードを考えた。義務化・国際化・システム化” 杉山宗武



Session2「これからの5年間」

- 座長：
土屋俊(千葉大学文学部)
- パネリスト：
片山俊治(東北大学)
関川雅彦(筑波大学)
杉山宗武(千葉大学)
内島秀樹(金沢大学)
石井道悦(広島大学)
杉田福夫(北海道大学)
- 話題提供：
杉田茂樹(北海道大学)

DRF6 session2 「これからの5年間」

DRF6 全体プログラム

- * 13:00-13:10 開会
- * 13:10-15:10 セッション1「これまでの5年間」
- * 15:30-16:45 セッション2「これからの5年間」
- * 16:45-17:00 閉会
- * 17:00-17:30 DRF新体制発足会

2010年2月5日(金)第6回DRFワークショップ「これまでの5年間、これからの5年間」を北海道大学附属図書館(札幌)で開催し、全国から、91名の参加がありました。全発表内容についてtwitterによる生中継を行いましたので、本誌ではエッセンスをお届けします。



未来の論文の形？～雑誌Cellの提案

DRF
メーリング
リストから

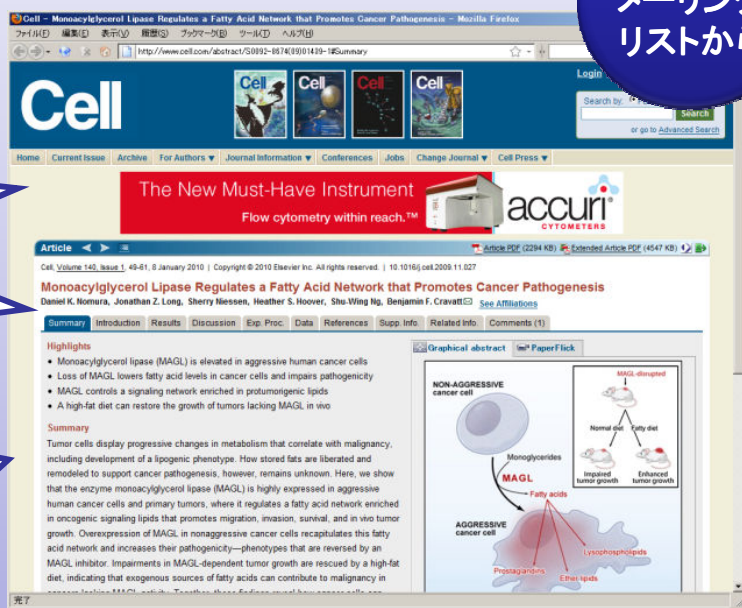
タブに分かれていて、ディスカッションやコメントの場所もあります。成果はこういった形で保存するようになる？リポジトリにはどう入れる？

雑誌担当者必見！

[drf:1639] 論文の形態に関しては、Elsevier といつか雑誌Cellが article of the future という提案をしています。

[drf:1643] 投稿段階、いや、研究開始段階から(ウェブスペースのホスティングを受けるかのように)研究過程や中間生産物を蓄積していけるようにしたら...

[drf:1645] 従来の scholarly communication は、全ての人に発信というのが基本姿勢だと思いますが、ICTにより m 対 n が自然にできるようにするのは？



DRFメーリングリストバックナンバーは、<http://drf.lib.hokudai.ac.jp/drflml/> からご覧になれます。

DRF
参加機関
紹介

OAK: 帯広畜産大学学術情報リポジトリ



Q1. 担当課担当係と運営体制をおしえてください。

学術情報室(=附属図書館。1室しかありません)です。当館ではグループ制をしているので「係」がありません。現在のところ、スタッフ2名がリポジトリ業務を担当しています。他の業務と兼務なのでなかなかリポジトリに集中できないのが悩ましい。

Q2. 導入システムは何ですか？

DSpace1.4です。リポジトリ立ち上げ時、お金がなかったので自力でインストールしましたがなかなか上手く動かず、先行大学の皆さんにずいぶんお世話になりました。

Q3. 公開時の苦労話や秘蔵話、他機関と違った活動などをぜひ。

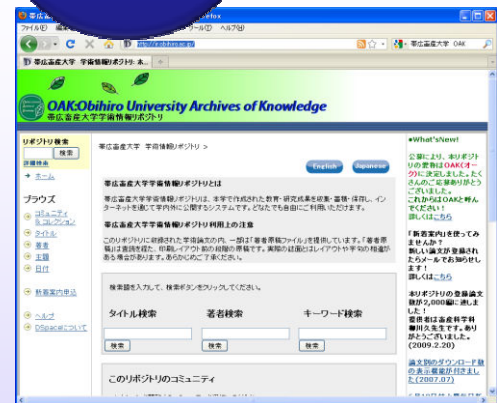
平成19年2月19日に試験公開、平成19年6月1日に正式公開しました。小さい大学ですので立ち上げ当初は文献を提供してくれる教員も少なく、結構寂しい思いもしました。業をにやして当時の課長が自発的に研究室を回って先生方にリポジトリへの協力をお願いしてくれた結果、多くの先生から文献の提供を受けることができました。この成果にあやかって、リポジトリが軌道に乗った今でも研究室周りは学術情報室長の大切な仕事となっています(笑)。

Q4. OAKのチャームポイントは？(ここが気に入るといったところを)

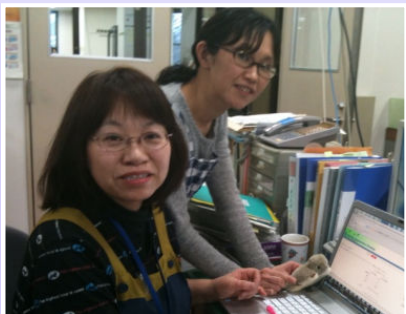
“OAK”の愛称とロゴです。実はつい先日、公募で決定したばかりなんです。リポジトリの中身で言えば、先生方がオープンキャンパス等のために作成した研究紹介のポスターに多くのアクセスがあって驚いています。

Q5. DRFに期待することは何ですか？

日本の学術情報界を牽引して行く先進の議論にも、リポジトリを始めたばかりの館の素朴な疑問にも、両方に応えてくれる懐の深さが魅力だと思っています。特に当館のような少人数で知識のあるスタッフもいない図書館にとっては、「頼るところがある」「みんなが助けてくれる」と言うだけで気持ち的に大きな支えになってくれています。これからも全国のリポジトリ構築館の頼れる「絆」でいて欲しいなあと思います。



OAKトップページ <http://ir.obihiro.ac.jp/>



担当の佐々木三千代さんと大平依理子さん

応募企画

川柳をつくろう 今号のお題は「ILL」

五・七・五の句を募集します。締め切りは3/31
句、雅号、お名前、ご所属を明記の上、gekkandrf@gmail.com までお寄せください

次号
予告

【特集1】地域ワークショップ, 研修会

2月に開催されたDRF-KanNihonkai(金沢大), DRF-Tosa(高知工大), 機関リポジトリ研修会(長崎国際大)を紹介!

【特集2】COAR総会

COARって何だっけ? 3月にスペインで開催されるCOAR総会のもようを速報

ほか、「全図書館員必見!」
「DRF参加機関紹介」等を予定

月刊DRFでは、みなさまからのお便りをお待ちしています。 gekkandrf@gmail.com

月刊DRF創刊号 平成22年2月26日発行 デジタルリポジトリ連合